

# 異なる世界観の間で

さんいん

## 山陰地方における占いの集会の事例から

まえ た さ き

前田彩希(神戸大学)

### 1. はじめに

日常生活の中では自分の理解を超えたことに対する不安は避けられない。自分や家族の病気や死、貧困、独身でいることや大学受験などへの不安は日常生活に混乱をもたらす。そのような科学的・合理的には説明しきれない、納得できない場合に人々は、真剣かどうかを問わず、しばしば占いに頼る。占いによって、自分が置かれている状況を超自然的に説明してもらい、これからの行動指針をもらうことで、人々は混乱の中でも日常生活を取り戻していく。そして、新型コロナウイルスの感染拡大、戦争とそれに伴う経済悪化などの社会不安が増大する現在、占いのニーズは増している。これは日本のみならず、韓国、東アジアでも共通の現象だろう。

現代の日本の地方社会における占いの一つに注目した本研究は、人々が占いによって複数の世界観に触れる中で、社会や自身の周りの状況に対する認識、理解の仕方を変えていくプロセスに迫る。

一般にはこの占いを信じるプロセスは、回心・入信・覚醒のような一時的・劇的な契機によって起こると考えられがちであり、それによって洗脳や詐欺といったイメージが付けられることもある。これまでの研究の中でも、占いは人々の状況認識を劇的に変化させることによって日常では得られない解決策を得ることができるものと説明されてきた。浜本[1983]はト占の特徴として偶然性に着目し、その偶然性によって問題を捉える世界観を変えて人びとの状況理解の可能性が上げられることで占いが意味を為すことを指摘する。そして、特に、この状況認識の変化は占師や相談者が一対一で問題を語り直すプロセスを経て行われることに注目されてきた[浜本 1993、石井 2005]。これらの研究でも占いの一時的・劇的なプロセスが着目されている。

しかし、後に述べるように、今回調査を行った占いの集会では、そのようなプロセスが十分に行われているとは言えず、1回の占いだけで状況認識の変化が起こっていると言い難い状況があった。そこで本研究では、占いの集会において参加者がどのように状況認識の枠組みを変化させるかに注目する。ここでは、こうした状況認識の枠組みを、世界で起こる現象や出来事に意味を与えるということから「世界観」という言葉で表すこととする。

### 2. 占いの集会

調査を行った山陰地方は、都市部とは地理的に隔たっているために、大山信仰<sup>1</sup>や両墓制<sup>2</sup>など特有の民俗宗教的な世界観が残存しており、それに基づく祈祷や民間療法が行われてきたことが記録されている。そのような山陰地方においても、学校教育やメディアによる情報網が整備されて久しく、科学的・合理的な思考は既に浸透している。現代のそういった状況下で、占いの新たな形態がみられる。それは、人々が集まって集会の形式を取ることである。

<sup>1</sup> 鳥取県西部の山で、標高 1729m の独立峰。古代の神話にも登場する。

<sup>2</sup> 遺体を葬る墓と供養を行う墓を別に設ける風習。

山陰地方のあるお宅では、複数の女性たちが集まり、占師を招いて占いや占師の話を楽しむ集会在数ヶ月に1回のペースで10年以上続けられている。この占いの集会は、栄養補助食品の購入・販売に関わりのある女性たち10名が集まり、占師ケルマデックさん(仮名)を自宅に招く形で行われる。この占いの集会は、ケルマデックさんと参加者個人が一对で占いを行う「個人セッション」、彼の話を参加者全員で聞くワークショップ「ワーク」から構成される。

「個人セッション」では、コインの表裏の出方を陰陽に変換し、『易経』<sup>3</sup>と照らし合わせて結果を得る「六爻占術」という方法が用いられる。ケルマデックさんは相談内容を聞くと、まず、相談者に3枚のコインを6回振らせる。そしてケルマデックさんがコインの裏の枚数を数え、その数が奇数なら陽、偶数なら陰に置き換えて、その陰陽6つの組み合わせを『易経』における六十四卦に対応させる。そして、彼独自の『易経』の解釈によって、相談者が置かれている状況の解説や問題解決のための改善策の提示を行う。改善策は特定の色・動物の置物やイラストを飾るというものが多く、この通りにすることで自分が望む方向に状況を変えられることができるとされる。実際その効果を実感する人も多い。

人数の都合上1人当たり15分程の時間しか与えられないため、ケルマデックさんはその限られた時間の中で一方的に早口で占い結果の説明を行う。そのため、人々は彼の話についていくことができず、大部分を理解できずに終わる。つまり、そこでは世界観の変化を起こすようなプロセスが不十分に終わっているのだ。

一方、「ワーク」では参加者全員がテーブルを囲み、上座にケルマデックさんを置いて彼の話を聞く。彼は身近な話題から話を広げ、現在世界で起こっていることは何なのか、我々はそれをどう理解し、どうしていくべきなのかについて説明する。「ワーク」はケルマデックさんも参加者も非常に楽しみにしており、彼は聴衆に問いかけながら、また参加者も彼に質問しながら積極的に話を聞く。

### 3. 「ワーク」

こうした占いの集会の特徴を踏まえ、本研究では「個人セッション」という占いの場があるにも関わらず、なぜ「ワーク」がわざわざ設けられ、重要なものになっているのかについて、「ワーク」に焦点を当てた分析を通して明らかにする。

#### 3.1 「ワーク」における知識

まず、ケルマデックさんが「ワーク」の中でどのような知識を用いるのかに注目する。彼が実際に話した内容を見てみると、科学的な知識、民俗宗教的な知識、フィクションの知識が含まれている。ケルマデックさんは日常生活では馴染みがないような難解な学術用語を、具体例を交えて説明し、世界で起こっていることの説明に用いる。そして、その学術用語を使って呪いや神話といった民俗宗教的な出来事や、マンガや映画などのフィクション作品も説明する。

例えば、新型コロナウイルス感染拡大に伴って出回る様々な情報とその悪影響について、「情報生命体/ミーム<sup>4</sup>」といった言葉を挙げ、それが何かわかりやすく説明した後に、富山県で起こ

<sup>3</sup> 天文・地理・人事・物象を陰陽変化の原理によって説いた書で、元来占いに用いられた。五経として儒教で重視されている経典の一つである。周易とも言う。

<sup>4</sup> 「ミーム」は、「ドーキンス(1976)が提唱した文化の伝承や模倣に関する遺伝子に似た概念。模倣を意味する

った藁人形<sup>5</sup>の事例や東南アジアのタブーの事例を挙げて話す。他の話では、ジブリ映画で有名な宮崎駿<sup>みやざきはやお</sup>の漫画作品にも言及する。彼は科学的知識を中心に話すだけでなく、民俗宗教的な出来事やフィクション作品から説明し、その補強として科学的知識を用いることもある。彼は「ワーク」の場において科学、民俗宗教、フィクションといった複数の世界観を組み合わせで説明を行っているのである。世代、宗教、教育などの背景が異なるそれぞれの参加者にとって、科学的な話、民俗宗教的な話、フィクションの話のどの世界観が馴染み深いかは異なる。しかし、ケルマデックさんの話の中で、普段馴染みがないような考え方にも触れ、その全てが無意識のレベルで繋がっていることを感じる中で、異なる世界観も自然と受け入れることが可能になっている。

### 3.2 「ワーク」における参加者の関与

次に、参加者が「ワーク」に対してどのような関与をしているのかに注目する。「個人セッション」が一部の希望者のみで行われているのに対し、「ワーク」には「個人セッション」をしない人も含めその場にいる全員が参加する。そのため、参加者の関与の程度にもばらつきがあり、ケルマデックさんの知識や考え方を習得しようと熱心に参加する人もいれば、占いや占師には疑念があるためあくまで参考程度に話を聞く人もいる。「ワーク」の場ではこうした異なる関与の程度の参加者が何かを強要されることなく同じ場を共有し、その経験が蓄積されることで、関与の程度に変化が現れる。そこでは、楽しそうにする他の参加者に影響され自分も楽しく感じ、その様子が他の参加者にさらに影響を与える様子が見られた。

実際にある参加者は、集会に参加し始めた当初は占いや占師のことをあまり信用していなかったものの、楽しそうにする他の参加者を否定できず、「ワーク」だけなら、と毎回参加を続けてきた。そのうち彼女に環境の変化や悩みが出てくる中で「個人セッション」にも参加することになり、この集会や占いに没入するようになったのだ。一方で、主催者の一人である女性も、自分自身はケルマデックさんの言うことを理解できないことも多いが、楽しそうに学ぶ参加者のおかげで集会を続けることができたとする。

このようにして、他の参加者に相互に影響され、影響を与える中で、徐々に関与の程度に変化が起るのだ。

## 4. 結論・考察

以上の「ワーク」の場における知識の用いられ方と参加者の関与の程度の分析から、「ワーク」の場は様々な世界観の知識を繋ぎ、参加者同士の相互行為を引き起こすことで、「個人セッション」だけでは不十分だった異なる世界観の受容、そして移行を補っているのだと言える。

この「ワーク」の場は、ゴフマンの言う「焦点の定まった集まり」とでき、その特徴である参加する個人の態度や感情の多様性が許される緩やかな世界が実現されている[ゴフマン 1985:32]。そのような緩やかな場において、異なる世界観の知識や異なる態度の参加者が共在し、そこでの相互行為の蓄

---

*mimeme* (ギリシャ語)に由来する。文化は遺伝子の複製のように他者に模倣され、突然変異のように新たに生じることもある。このようにして文化は次世代に受継がれていくので、遺伝子にたとえてミームと表現した[石川ら編 2010:1252]とされており、進化生物学・動物行動学・生物学の分野で最初に持ち出された概念である。

<sup>5</sup> 藁で作った人形。信仰や呪詛的なものに用いられ、呪う人を模した藁人形を神木に打ち付けてその死を祈る「丑の刻参り」で広く知られている。

積を通じて参加者の態度は占いや占師を受け入れる方向へ漸次的に移行する。つまり、この「ワーク」の場では世界観の劇的な変化ではなく、漸次的な変化が起こっているのである。

これは新宗教現象において目に見えないほど緩やかに信仰が形成されていくことを指す「解釈的漂流」[土佐 1997]というルーアマンの提唱した概念と類似する。新宗教運動において信者は、ゆっくりとほとんど気づかないうちに出来事を解釈するやり方を移行することがあるが、そのような目に見えないほど緩やかで微妙な移行が「解釈的漂流」である。「解釈的漂流」は、「経験の積み重ねと知的習慣が複雑に絡み合いながら変化していく半ば無意識的な流れ」であり、そのなかで「信仰は懐疑に対する免疫をそなえたもの」[土佐 1997:200-201]になる。

占いを信じるプロセスは、占師と依頼者が一対一で話す中でもたらされる、回心や洗脳のような劇的な変化として捉えられてきた。しかし、そういった占いの場とは異なる「ワーク」の場では世界観の移行の過程が異なっている。「ワーク」によって、異なる世界観の知識や異なる関与の程度の参加者が共存し交わり、蓄積していくことを通じた、参加者の世界観の漸次的な移行つまり「解釈的漂流」が可能になっているのである。

## 5. おわりに

このように、この事例からは様々な知識や参加者が共在し、蓄積される漸次的なプロセスによって、人々は自分なりに世界観の理解と受容、移行を行っているということがわかる。本研究では山陰地方における占いの一事例の研究を通じて、人々が世界を理解する、状況を認識する枠組みを取得するプロセスの一つを提示することができた。

「ワーク」のなかでは単に占いを信じる方向へ向かうだけでなく、民俗宗教的知識から科学的知識へ移行したり、「ワーク」への参加の中で没入していない状態へ移行したりすることもある。これらを踏まえ、異なる世界観の間の一方的ではなく双方向的な移行の可能性、関係性についてより深める必要がある。このように異なる世界観の移行が頻繁に起こる占いに注目することで、この点に関してさらに検討していくことができると考えられる。今後は対象を日本の外にも広げ、人々が占いを通じてどのように世界や自分の周囲の状況を理解していく、理解の仕方を変えていくのか、研究をより深めていきたい。

## 参考文献

- 石井美保(2005)「もの/語りとしての運命-ガーナのト占アファにおける呪術的世界の構成」『文化人類学』70(1), 21-46. 日本文化人類学会.
- E. ゴフマン(1985)『出会い 相互行為の社会学』佐藤毅・折橋徹彦訳. 誠信書房.
- 土佐昌樹(1997)「呪術の現代性-呪術論に見る現代西洋の他者表象-」『岩波講座文化人類学』183-208. 岩波書店
- 野澤豊一(2010)「対面相互行為を通じたトランスダンスの出現-米国黒人ペンテコステ派教会の事例から-」『文化人類学』75(3), 417-439. 日本文化人類学会.
- 浜本満(1983)「ト占(divination)と解釈」『儀礼と象徴-文化人類学的考察』九州大学出版会.
- 浜本満(1993)「ドゥルマの占いにおける説明のモード」『民族学研究』58(1), 1-28. 日本文化人類学会.
- 石川・黒岩・塩見・松本・守・八杉・山本編(2010)『生物学辞典』東京化学同人